

2020.12.6 第一主日待降節Ⅱ礼拝

ルカ1：18-20、57-64「閉じられた口と賛美」

聖書

18 ザカリヤは御使いに言った。「私はそのようなことを、何によって知ることができるでしょうか。この私は年寄りですし、妻ももう年をとっています。」

19 御使いは彼に答えた。「この私は神の前に立つガブリエルです。あなたに話をし、この良い知らせを伝えるために遣わされたのです。」

20 見なさい。これらのことが起こる日まで、あなたは口がきけなくなり、話せなくなります。その時が来れば実現する私のことばを、あなたが信じなかったからです。」

57 さて、月が満ちて、エリサベツは男の子を産んだ。

58 近所の人たちや親族は、主がエリサベツに大きなあわれみをかけてくださったことを聞いて、彼女とともに喜んだ。

59 八日目になり、人々は幼子に割礼を施すためにやって来た。彼らは幼子を父の名にちなんでザカリヤと名づけようとしたが、

60 母親は「いいえ、名はヨハネとしなければなりません」と言った。

61 彼らは彼女に「あなたの親族には、そのような名の人はいません」と言った。

62 そして、幼子にどういう名をつけるつもりか、身振りで父親に尋ねた。

63 すると彼は書き板を持って来させて、「その子の名はヨハネ」と書いたので、人々はみな驚いた。

64 すると、ただちにザカリヤの口が開かれ、舌が解かれ、ものが言えるようになって神をほめたたえた。

はじめに

先週から待降節（アドベント）に入り、11/29は待降節第1の礼拝をささげました。今日は待降節第2の礼拝となります。クリスマスを待ち望む思い

を日ごとに引き上げていただき、キリストの誕生を共に喜びましょう。今年
はコロナで始まった一年となりました。まだ終息には至らないのでコロナと
共に年を締め括ることになるでしょう。コロナによって生活様式が変わった
ように教会の礼拝も様子が変わりました。私たちの教会では人数制限などは
あっても、雰囲気はそれほど変わっていないと思いますが、教会によっては
声を落として賛美するとか、声を出さずに心の中で賛美するところもあると
聞いています。それぞれの教会の状況に合わせて感染症予防に努めているわ
けです。今まで声を出して賛美していたのを声を出さないで賛美する形に変
えることは、見た目にも大きな変化です。声を出して賛美できることの幸い
を改めて思います。ことばに込められた思いや力は大きいですね。クリスマ
スの出来事にあたり、ことばを失ってしまった人物がいます。バプテスマの
ヨハネの父であるザカリヤです。ザカリヤがことばを失った理由とことばを
回復し神さまを賛美した経緯を辿ってみましょう。

1. クリスマスに想う

先日、インターネットにクリスマスの雑学に関する問題が出ていたので試
しに行ってみました。確か一問目か二問目だったと思いますが、12月25日
は誰の誕生日ですかという問題があり、私はイエス・キリストの誕生日だと
答えたら×でした。回答は誰の誕生日でもないというものでした。なるほど
と思いました。確かにキリストの誕生日が何月何日であるかは聖書に記され
ていません。またクリスマスの起源も諸説あり、初代のキリスト者たちが祝
っていたわけではなく、4世紀にキリスト教がローマの国教になって行く中
で、当時ローマで行われていた太陽神を祭るお祝いをキリスト教が取り入れ
て行ったという話を聞かれたことがあると思います。そうした背景を知って
いる方は異教の祭りをキリスト教化したクリスマスに意味はあるのかと疑問
をぶつけてくる方もいるかもしれません。

日本では今は誰もが出生の日がはっきりしていますが、2,000年も前の貧
しい大工の息子の誕生日が記録されることはありませんから、12月25日と

いう日付に誕生の意味を持たせることには無理があるでしょう。クリスマスの起源やお祝いの仕方についても聖書から裏付けを取るのは無理です。しかし、そうだからと言ってキリストの誕生を祝うことに意味がないとは思いません。否、むしろキリストの誕生は人類全体に重大な意味を持っており、それゆえに教会はクリスマスの意味を声を大にして世に伝えなければいけないと思っています。クリスマスを祝った一週間後には神社仏閣に行って参拝(初詣)する日本人特有の文化の中にあっても、クリスマスシーズンはある種の霊的流れが世の中全体を包んでいます。教会はクリスマスという霊的な空気の中で、キリスト誕生の本当の意味を伝える責任があると強く思われています。

2. 喜びの知らせ

クリスマスは私たちへの喜びの知らせです。キリストは私たちに罪の赦しを宣言し、永遠のいのちを約束するために神さまから遣わされて地上に生まれてくださった救い主です。もしキリストが誕生してくださらなければ、私たちは罪の中に閉じ込められたままで、一生涯罪から解かれることなく歩まなければなりません。罪の苦しみを解いて赦しを与えてくださるためにキリストが生まれてくださったのですから、これが喜びでなくてなんでしょうか。

今日取り上げた聖書箇所はキリストの道備えをしたバプテスマのヨハネの誕生にまつわる記事です。バプテスマのヨハネの父ザカリヤは祭司で、妻はエリサベツと言います。エリサベツは不妊の女性でしかも高齢になっていましたが、夫婦は子どもが与えられることを願っていました。そのような夫婦に大変名誉な務めが回って来ました。神殿に入って香をたく務めにザカリヤが選ばれたのです。神殿で香をたく務めは祭司にとっては一生に一度あるかないかのもので、くじで当たらなければ一生その務めに当たることなく祭司職を終える者もいたようです。

ザカリヤにとっては人生最高の舞台が整ったわけです。それは大変名誉なことですが、それだけではなくもっと名誉なことが神さまによって告げられたのです。それは念願かなって高齢夫婦に子どもが与えられるということであり、しかもその子は救い主キリストのために道を備える先駆者となるというものです。御使いはザカリヤの前に現れて、「この私は神の前に立つガブリエルです。あなたに話をし、この良い知らせを伝えるために遣わされたのです。」(19節)と、ザカリヤに「良い知らせ」が伝えられました。ところがザカリヤはこの良い知らせを素直に受け入れることができませんでした。それもそのはず、ザカリヤもエリサベツも高齢になっていましたから。本来なら「神さま、ありがとうございます」と感謝するところなのですが、ザカリヤの戸惑いは神さまを賛美する機会を失うことになってしまいました。ただし、そこにも神さまのあわれみは働いていて、「見なさい。これらのことが起こる日まで、あなたは口がきけなくなり、話せなくなります。その時が来れば実現する私のことばを、あなたが信じなかったからです。」(20節)と、口がきけないのは限定的であることに慰めを得ます。

神さまは私たちに良い知らせを届けてくださるお方です。しかし、その時の私たちの状況によっては良い知らせを受け取り損ねてしまうことがあるかもしれません。仮に今受け取るチャンスを逃したとしても、「神さまの時」が必ずありますから、その時を待てばよいのです。神さまの時が来ると、私たちの状況に関わらず、神さまはご自分の御業を果たされるのです。クリスマスに関わる一連の出来事は神さまご自身が導いておられるのであり、それがザカリヤがわが子に名前を付ける場面に表されています。

3. 神さまご自身の導き

ユダヤでは通常子どもの命名権は父親が持っていました。ですから生まれてくる子どもの名前はザカリヤが付けるのが普通です。ところが御使いがザカリヤに現れたとき「あなたの妻エリサベツは、あなたに男の子を産みます。その名をヨハネと付けなさい。」(13節)と、神さまによってヨハネという名

前がつけられたのです。実は神さまによって名前が付けられたのは2人しかいません。バプテスマのヨハネとイエスさまだけです。救いの道を備えるヨハネとその道を完成させるイエスは、神さまご自身のご計画によって備えられた者であることが命名によって明らかに示されたのです。神さまはご自分のご計画をご自分の時に実行されます。ですから、先ほどお話した救いの良い知らせを受け取る時を逃したとしても大丈夫です。神さまの時が来るとその良い知らせは必ず与えられるからです。

但し、一つ注意しなければいけないことがあります。それは神さまが私たちに与えたく願っている救いの良い知らせを意図的に退けるなら、その良い知らせは与えられないということです。神さまは救いなど要らないという人に、無理やり与えることはなさいません。ザカリヤは神さまの良き知らせを意図的に拒んだものではありません。ザカリヤの反応は高齢夫婦に子どもが与えられるという約束に対する自然な戸惑いであって、神さまへの悪意や反逆と言った意図はありませんでした。それゆえに、ザカリヤがわが子に「ヨハネ」と付けたときに、閉ざされた口は一気に解かれ、神さまへの感謝と賛美が溢れんばかりに湧き上がったのです。

4. 解かれた口で主を賛美

神さまはザカリヤの口を開いてくださいました。ザカリヤは開かれた口で「神をほめたたえた」(64 節)のです。私たち人間の口は人を罵ったりはるかしめるためにあるのではなく、神さまをほめたたえるために与えられているのです。しかし残念なことに、私たちの語ることばは何と罪深いことでしょう。「舌を制御することができる人は、だれもいません。舌は休むことのない悪であり、死の毒で満ちています。」(ヤコブ 3:8)とありますように、ことばを制御することは本当に難しいのです。私たちが語ることばは心の中から出てくるものであり、それが人を汚すのだとイエスさまも言っておられます(マルコ 7:14-23)。心の中に巣くっている罪が赦されたとき、人は語ることばが感謝と賛美に変わって来ます。

私たちは今日の礼拝でも賛美をしました。賛美は神さまへの感謝と信頼の証としてささげるものです。私たちの罪が赦されたことへの感謝が賛美となって神さまにささげられるのです。賛美は教会の集会の時だけのものではありません。毎日の生活の中で、折々に神さまの救いの恵みを思うたびにささげられるものです。日常の中に賛美が自然にあふれるような生活を送ることができたら幸いです。クリスマスを通して、罪の赦しを得、賛美の生活へと導いていただきましょう。

まとめ

賛美はクリスマスに最もふさわしいものです。救い主イエス・キリストの誕生を心から賛美しましょう。「新しい歌を主に歌え。全地よ、主に歌え。主に歌え。御名をほめたたえよ。日から日へと御救いの良い知らせを告げよ。主の栄光を国々の間で語り告げよ。その奇しいみわざを、あらゆる民の間で。まことに主は大いなる方、大いに賛美される方。すべての神々にまさって恐れられる方だ。」(詩篇 96:1-4)。イエスさまを救い主として迎えた一人一人が、主の御救いをほめたたえ告げ知らせるために賛美できたら何と幸いです。そのために私たちの口は与えられているのです。私たちの賛美を通して、どなたかの心に救いの恵みが注がれますようにお祈りします。